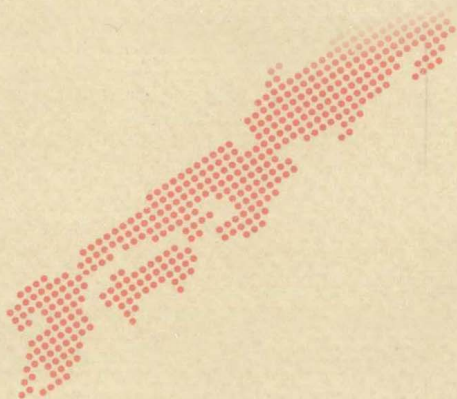


英夫はなる!



# 日本はこうなる！

一九八五年十月三十日 第一刷発行 一九八六年二月二十一日 第五刷発行

著者——糸川英夫

定価——一二〇〇円

カバー写真——管 洋志

装幀——平良 徹

© Hideo Itokawa 1985, Printed in Japan

発行者——野間惟道 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三—三 郵便番号二三

電話 東京〇三—九四—二二（大代表）

印刷所——慶昌堂印刷株式会社 製本所——大製株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。（字二）

ISBN 4-06-202006-8(0)

## まえがき

「日本はこうなる！」という表題が語るように、これは、日本についての未来予測の一つである。

未来予測が流行した時期があった。

高度成長期の初期で、有名な所得倍増論の提唱者である下村治氏しもむらおさむがそのはしりと言ったら、下村氏に失礼に当たるであらうか。

オイルショック前後からの下村氏の予測は、経済成長の要因が日本から消えたから、ゼロ成長になるはずだという、一貫して厳しいものであることも、よく知られている。

高度成長期に入ると、いろいろな未来予測が百花撩乱というか、百家争鳴というか、にわかになぎやかになったが、オイルショックの予測もなされないままに何となく、「バラ色の未来論」に人氣がなくなつて流行はやらなくなった。

そして、今や日本は太平洋戦争の無条件降伏から四十周年を迎えることになり、その未来は、混沌たる様相である。

私はかつてオイルショックを予測したために、評判が悪くなった話は、逆転の発想シリーズの『続逆転の発想』（十一～十四ページ）に書いた。

昭和三十年前後、私がロケット実験の責任者として秋田県にいた頃、秋田は県民をあげて「八郎潟の干拓事業」に熱を入れていた。

たまたま、県庁のさる方から、この計画についての感想を聞かれて、「反対声明」をした。

その理由は、この計画が完成するときは、干拓後に予定されている「米作地帯」は米過剰で不用のものになる。対策としては、八郎潟を反対に深くして湖にし、「白鳥の湖」と名づけて、サーフィン、ヨットのレジャーセンターにし、底を掘って出る土で滑走路を作り、国際空港（成田はまだ存在していなかった）を作り、IC工場を誘致する、というプランであった。

この案は、もちろん不採用で、八郎潟干拓計画は完成し、結果は私の予想通り、惨憺たる結末になった。

いまにして、テクノポリス熱に浮かされている地方自治体は、余りに感度がにぶすぎると思うのである。

ついで、ロケット実験場は鹿児島に移り、ここで県の計画している「志布志湾」石油コンビナート」構想に出合う。

これも、私は反対。

鹿児島は、アメリカのサンベルトと同じように、「学研センター」たりうる地理的条件があるから、大学研究所を誘致して、「学研センター」にすべし、が私の答案であった。

当時、筑波学園都市はまだなかった。

私の未来予測は、当たっていたように思えるのは、当人のうぬぼれであろうか。

この本に書いた、これからの日本も、同じようなコースを歩むことになるのだろうか。

大方の読者諸兄諸姉の御明察を、お願い申し上げる次第である。

一九八五年十月

糸川英夫



日本はこうなる！●目次

## 第一章 無頓着<sup>むとんじゃく</sup>な日本人

日本礼賛の本の著者はほとんどユダヤ人 23

日本民族の唯一の味方 23

ユダヤ人はなぜナチスに嫌われたか 24

日本人とユダヤ人の六つの共通点 25

日本民族はたまたま虐殺されなかっただけ 27

日本民族の強烈な浸透<sup>しんとう</sup>圧現象 29

どんなところへも浸<sup>し</sup>み込んでいく民族 31

世界中、どこにでもいる日本人 34

炎熱も酷寒もいとわない日本人 35

民族の浸透圧が戦争を起こす 37

小さな島国ゆえに外を見たがる 38

日本人は世界で一番好奇心が強い 39

日本は外地の日本人をいざというとき救えない 40

日本人のやることはいちいち気にされている 41

被害者のことには目をつぶる日本人 42

蛮性を失い、不振のドイツ民族 44

「生活の質」を優先し、生産力がガタ落ち 46

「日本が諸悪の根源」 47

無知、無頓着な日本人 48

韓国の成長も「もう一つの日本」と表現されている 49

「日本に好ましくないことは何でも喜ばしい」 49

日本の失敗を期待している 51

「ロー・トリック・イン・ハイテク」 52

宇宙ステーション構想のアメリカの狙い 54

宇宙の核爆発は地上のハイテクを全滅させる 56

アメリカにとって死ぬほどこわいこと 56

ソ連をたたき、日本をたたく 58

アメリカが仰天した日本の宇宙開発計画 60

必ずアメリカが出してくる日本への二つの要求 62

「日本突出」という異常事態 64

勇気を持って不況を選べ 64

## 第二章 ロス五輪にみる日本人の宿命

ロス五輪が日本人に突きつけた二つの問題点 69

まったく不人気だった日本選手 69

愛嬌あいきょうゼロという大きな欠陥 71

相手が敵になるか、味方になるかはユーモア次第 72

つい言いそびれてしまう表現ベタ 73

ノーベル賞が少ないのも評価ベタのせい 76

「沈黙」が与える不可解さ 77

日本語の言語構造の宿命 79

ユーモア教育が日本を救う 80

情緒的原因で日本選手は敗けたのか？ 81

アメリカの勝因はバイオメカニックス 82

マイクロエレクトロニクスの総動員 83

どうすれば強くなるか、ケガを防げるか 84

二年間の動機調査でやる気の有無を判定 86

画期的なフィードバック・システム 87

即時に選手が自己診断できるシステム 89

カール・ルイスはなぜ二回しか飛ばなかったか 91

ベノイトの女子マラソン優勝は光ファイバーのおかげ 92

ベストコンディションを保証した体内時計の管理 93

サイエンス・オブ・フィットネスの勝利 94

スポーツにおける生産・品質管理システム 96

アメリカの目的は国民全体のパワーアップ 97

そのまま残っている四十年前の非科学性 98

日本を破局に追い込んだ情緒的マネジメント 100

第三の開国で傷つかないために 101

### 第三章 なぜ日本人は欧米人に嫌われるのか

衝撃的なカウラ収容所事件 107

戦死という名の集団自殺 109

現代にも同じ危険性を感じる 110

個人主義か、集団主義か 111

アラブの王様の驚くべき個人主義 112

個人主義ゆえのアメリカの悩み 113

ユニークか、エキサイティングか、日米の発想の違い 114

アメリカ製自動車はなぜギクシャクしているか 115

アメリカの失敗、日本の失敗 116

外国の日本のサイエンスへの異常な関心 117

世界的権威『ネイチャー』誌の日本へのいまいましい気持ち 118

「日本は結局、科学に何も貢献していない」 119

「日本には科学はなく技術だけである」 120

ますます強まるサイエンスなき日本への反感 121

認知的不協和の理論 123

私の東大教授時代の苦い体験 124

履歴書に顔写真が貼ってあるのは日本だけ？ 125

日本での成功の秘訣はこまめに顔を出すこと 126

アメリカだったら「もう来るな」になる 127

「日本の海軍と陸軍はなぜ対立したか」 128

「日本人は顔を見ていない者とは必ず対立する」 130

「日本は内部抗争によって破綻する」 131

人間の右脳と左脳を分離した実験 133

アメリカでメディアが発達する必然性 134

ニューメディアはますます日本人の独創性をダメにする 135

科学的独創力は宗教心から 137

偉大な科学者は、立派な宗教人 139

宗教心なき日本民族の壁 140

羨望が嫉妬と憎しみになっていく 141

本質がわかっていない日本 142

#### 第四章 日本と日本人のビッグ・トレンド

トヨタの決断——アメリカ進出の成功のカギ 147

トヨタの巧妙なアメリカ作戦 148

日本の利益率ではアメリカでは即刻クビ 149

労組の幹部を経営陣にスカウト 150

どこまで通用するか日本式マネジメント 152

「不適応現象」が表面化してくる 152

江崎玲於奈博士の不適応現象 154

日本のカルチャーから一度出た日本人の悲劇 155

企業の海外進出には相当な覚悟を 157

私の四十年前の未来予測は幸か不幸か適中 158

日本人の拡散現象と凝縮特性 159

異常な日本人のハイテクノロジー志向 161

ハイテクノロジーが日本を滅ぼす 162

ハイテクノロジーとは新技術のことか!? 163

ローマ帝国はなぜ衰亡したか 164

ハイテクノロジーは絶対的善にはあらず 165

ハイテクノロジー信仰が社会格差を助長 166

ハイテクの経済的効果は意外に少ない 167

経済とはしょせん、お鍋である 169

マイケル・ジャクソンはハイテクの成功例 169

アメリカのハイテク文化のすぐれた点 170

ハイテクのカーボン繊維は釣竿で生き残った 171

品質管理には見事な能力を発揮する日本人 173

日本のハイテクの底は思っているより浅い 174

パシフィック・リム構想とは 176

有色人種のバイタリティーの利用を考えるアメリカ 177

日本はしょせん、アメリカ塾の優等生か 178

## 第五章 種族工学の発想と視点

- アメリカ精神とベトナム戦争の痕跡 183  
本質を衝いていないベトナム戦争論 184  
ベトナム戦争は種族間戦争である 185  
アメリカの錯覚と過剰反応 187  
種族間戦争が米ソ対立となる不安定構造 188  
ことごとく当たったゴードンの未来予測 189  
「戦争は不可避である」 191  
種族工学研究所の設立 192  
日本人はどルーツに無関心な民族は珍しい 192  
「米ソにはテクノロジ―免疫がない」 193  
アフガン侵攻も種族戦争である 194  
当面の種族工学の二つの使命 195  
私を刺激したイスラエルの日本音楽研究 197